

平成22年5月14日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



前号で戦中・戦後の土浦中学校の様子を記しましたが、今号もその時期の話題を取り上げてみたいと思います。旧本館の資料展示室にコンクリート製の裃姿の胸像（左の写真）があるのをご存じでしょうか。陳列台に「藤田東湖像」との標示があります。本校の歴史にかかわる文物を展示しているこの部屋になぜ「東湖像」があるのでしょうか。太平洋戦争末期、国は国家存亡の危機に際し、中学生まで戦力として動員する体制を強化しました。若人の戦意を鼓舞し、皇国民として国に殉じる精神を培う目的で、幕末の尊王攘夷論者をこの時期の中学校に登場させたものと思われます。

軍国主義教育の強化

日中戦争の長期化にともない、昭和12年には国民精神総動員の運動が起こり、軍部の検閲などによって言論・出版・集会の自由が拘束され、昭和13年には国家総動員法、翌14年には国民徴用令が制定され、戦時体制が強化された。

こうした全体主義的国家体制が推し進められる中で、学校教育も軍国主義教育が一段と強まり、同年5月、天皇は「青少年学徒一賜ハリタル勅語」を下賜し、中学生らに戦時下の責任と自覚を求めた。

中学校では、出征兵士の送迎・戦勝祈願・詔書奉読・時局講演・勤労奉仕などが重要な学校行事となり、学校教練も内容が強化され、実戦に近い訓練を行うという、学校教育がそのまま軍事訓練の場になっていった。

土中でも、昭和16年10月には「進修報国隊」が結成され、防衛訓練の名の下に全生徒の軍隊化が進められた。

太平洋戦争が激化し、戦況が緊迫した情勢にあった昭和18年1月、「中学校令」が公布され、教育の目標を「皇国ノ道ニ則リテ高等普通教育又ハ実業教育ヲ施シ国民ノ錬成ヲ為ス」と定め、すべての学校生活をもって天皇制擁護のために奉仕・献身する国民の育成を目指した。

軍需工場への動員

戦局の悪化にともなって、軍隊への大動員が進み、国内での労働力不足が深刻化してきたので、昭和18年6月、「学徒戦時動員体制確立要綱」が制定された。これは「学徒ヲシテ有事即応ノ態勢ヲラシムルト共ニ之ヲ勤勞動員ヲ強化シテ学徒尽忠ノ至誠

ヲ傾ケ其ノ総力ヲ戦力増強ニ結集セシメン」とし、この中の「有事即応ノ態勢」とは、軍事能力の増強を図り、直接国土防衛に協力させることで、そのために体育訓練、戦技訓練、防空訓練の強化・徹底を図ることであった。もう一つの目標とされた「勤勞動員の強化」は、学生・生徒を戦力増強に直接必要な作業に、常時かつ集中的に動員できるようにしたものである。

あの手この手の戦意高揚策

戦況が日増しに悪化していく中、生徒達の愛国心を高め、国に殉じようとする精神を養うために、国家による思想や教育の統制がさらに強化された。

土浦中学校でも、天皇への絶対服従を説く「軍人勅諭」の暗唱、集会の場での奉誦が頻繁に行われた（昭和19年度、朝礼での勅諭奉誦は23回にも及ぶ）。

また、軍人を招聘しての講演会もしばしば催されている。

この頃、国民の戦意高揚のための映画が盛んに制作され、土中でもそうした映画鑑賞を、教師引率のもとに何度も実施している。

ところで、昭和18年5月、土浦中学校で藤田東湖祭が開催された。東湖は尊王思想の先駆者であり、水戸学の中心的人物だが、その東湖の胸像が中庭に建てられ、東湖を祭る式と彼についての講話が実施された。目的は皇国民意識の高揚を図ったものだが、本校独自の催しではなかった。「この像はコンクリート製で、青色に着色されていてブロンズ像そっくりであった。また、これは学校が自らの意志で作ったものではなく、県から支給されたものだった」と元本校教諭であつ

佐久良東雄歌碑
(善応寺境内)



た永山正先生は当時の様子を伝えている。この像は、終戦後進駐軍の追求を避けるため校庭に穴を掘り埋められたが、その後、いも畑になっていった校地を耕していた小使（用務員）さんによって偶然掘り出された。

また、昭和19年12月、佐久良東雄歌碑除幕式が行われた。東雄は、幕末期に皇国思想の普及に努めた国学者であり、万葉調歌人でもあった人物（八郷の生まれで、若い頃真鍋・善応寺の住職をしていた）で、彼の歌「すめらぎにうかへまつれとわれをこみしわがたらちねたふらかりける」の碑を作ることになった。その経緯については明らかでないが、先の永山先生によれば、「校内にはそのような動きはなかった。おそらく大政翼賛会土浦支部あたりからの働きかけを受けた学校が進修同窓会に諮り、決めたものと思われる」とのことであった。武井大助海軍主計中將（中3回）の揮毫になる東雄の歌碑は建設中の講堂玄関前に竣工した。これも、翌20年9月には、超国家主義思想の排除ということで土中に埋められたが、昭和28年に校庭から掘り出され、善応寺境内に再建された。東湖も東雄も、本校の激動の一時期に特異な形でかわった思想家として記憶に留めておきたい。